

画家の系譜

三岸家は、節子の夫・好太郎が画家で、その間に生まれた息子・黄太郎も画家となり、芸術の才が受け継がれていきました。また、節子の師である岡田三郎助や、郷里を近くする先輩画家・荻須高德、そして画家同士の絆で結ばれた小林和作など、節子につながる画家たちを作品とともに紹介します。

師・岡田三郎助と夫・三岸好太郎

1921(大正10)年、洋画家になることを志した16歳の節子は、両親の反対を押し切って上京、最初に師事したのが岡田三郎助(1869-1939)でした。まだ画家の卵だった節子と、官展の大御所である岡田とを引き合わせたのは、節子の遠縁の画家・渡辺昇(1898-1998)です。渡辺は東京美術学校(現・東京藝術大学)時代に岡田の下で学び、卒業後は帝国美術展覧会に入選するなど高い評価を受けていたことが、近年の調査で分かってきています。節子は、岡田の画塾で学んだ後、女子美術学校(現・女子美術大学)に編入し1924(大正13)年、首席で卒業しました。

卒業後間もなく節子は、在学中に知り合った新進気鋭の画家・三岸好太郎(1903-1934)と結婚します。翌年には夫婦ともに第3回春陽会に入選、節子は女性初の入選者となり、順調に画家人生を歩み出したかにみえました。しかし、才気溢れる好太郎との生活は、芸術家として得るものが大きい反面、好太郎の放蕩と貧困に悩まされる日々が続きます。1934(昭和9)年、好太郎は旅先の旅館で病死し、わずか10年間の結婚生活は突如として幕を閉じました。



1927年頃 三岸好太郎

長男・黄太郎も画家の道へ



1968年12月 カーニューにて 左:黄太郎 右:節子

生前、好太郎はフランスに行きたいと何度も語り、1930(昭和5)年に生まれた長男に「^{ぱり}巴里」と名付けるほどでした。好太郎の死後、巴里は父が好きだった色から「^{こうたろう}黄太郎」と改名され、父と同じ音を持つ名に導かれるように、次第に画家を志すようになります。1953(昭和28)年、黄太郎は私費留学生としてフランスに渡り、翌年節子が念願の初渡仏を果たす足掛かりを作りました。1968(昭和43)年、節子と黄太郎一家は再びフランスに移ると、以降20年間を彼の地で過ごしました。目まぐるしく画風を変遷させた好太郎、情熱的な色彩画家・節子とも異なった、独自の静謐な絵画世界を深化させながら、黄太郎は節子のフランスでの制作活動を支え続けました。

郷里の先輩画家・荻須高德と、盟友・小林和作

荻須高德(1901-1986)は現在の稲沢市、かつて中島郡と呼ばれた節子の郷里と同じ地域に生まれ、東京美術学校卒業後は画家人生の大半をフランスで過ごしました。節子30代の頃、戦況悪化で荻須が一時帰国していた時期に二人は新制作派協会で活動を同じくしています。フランス帰りの4歳年上の荻須を画家として、また人格者として尊敬していた節子は「中京人はこのすぐれた画家をもつと誇りにし大切にしてほしい。めつたにこれだけの芸術家を持つことはできないのだから。」^(注)と記しています。

戦前から戦後にかけて、節子が遠く広島県尾道まで足繫く通って交流していたのが小林和作(1888-1974)です。17歳も年の離れた二人ですが、ともに裕福な家庭に生まれながら没落の苦渋を味わい、伴侶と死別した等共通点も多く、画家同士の深い結び付きがあったようです。尾道に隠居した和作の作品が、再び中央画壇に注目されるようになったのも、節子による働きかけがあったからだといわれています。